### 10. 右鎖骨下動脈と右冠状動脈から気管支動脈に異常血管を認めた慢性肺血栓塞栓症の1例

吉田多賀子，岡田　理，田邉信宏
（千大）

症例は56歳男性。1987年右下肢リンパ浮腫・静脈炎の既往があり，2002年9月胸膜炎と診断され，その後息切れが持続。2002年12月肺血栓塞栓症と診断された。2003年5月当院入院。平均肺動脈圧42mmHg，肺血管抵抗 682.4dyn. sec. $cm^{-5}$，NYHA Ⅲ度，血栓は中枢性であり，手術適応と考えた。冠動脈造影検査にて，右鎖骨下動脈と右冠状動脈から右気管支動脈へ，異常血管が認められた。7月28日，血栓内膜除去術施行。術後，平均肺動脈圧17mmHgに改善，肺動脈造影検査でも著明な改善が認められた。本症例は，右鎖骨下動脈と右冠状動脈から右気管支動脈に異常血管を認めた慢性肺血栓塞栓症であり，文献的考察を加え報告する。

### 11. 肺血栓塞栓を伴った右肺動脈下行枝瘤状拡張の1例

清水秀文，戸島洋一（東京労災）

症例は63歳男性。1週間持続する咳嗽を主訴に平成15年9月外来受診。CXRにて右肺動脈下行枝の瘤状拡張を認め，入院精査に。CT，MRI，肺動脈造影で右肺動脈下行枝の瘤状拡張と壁在血栓を認め，連続する血栓にて中葉枝は閉塞。左肺や下肢静脈に血栓は証明されなかった。肺血流シンチで右中葉に欠損像があり，右心カテーテルでも軽度の肺高血圧を認めたが，呼吸困難感や低酸素血症はなかった。CRP 2.3mg/dl，赤沈 78mm/hrと炎症所見があるが，抗核抗体やANCAは陰性。他所見も併せ，ベーチェット病も否定的と考えられた。右心カテの際に施行した血栓吸引細胞診では悪性所見はなかった。診断に至る所見が得られず，現在はワーファリンの内服のみで外来通院としている。本症例についての考察およびワーファリン内服後の経過を報告する。

### 12. 多発性肺動脈分枝狭窄症の1例

芦沼宏典，瀬戸武志，田邉信宏
（千大）

症例は31歳女性。1歳時より心雑音指摘されていた。小学生の頃より労作時呼吸困難（H-J Ⅱ度）を認め，心雑音の精査行うも機能性雑音と診断された。18歳時，胸部異常陰影（左2弓の突出）を指摘され右心カテーテル検査施行し，平均肺動脈圧32mmHgで原発性肺高血圧症と診断されたが，その後放置。2000年6月，妊娠し周産期管理のため当院産婦人科，当科紹介された。2001年2月，合併症もなく経腟分娩で女児を出産。その後，受診せず。挙児希望にて肺高血圧の精査目的で2003年2月当科外来受診。肺換気血流シンチグラフィーでは換気ほぼ正常，右上葉血流低下，左肺尖部血流欠損を認められた。右心カテーテル検査では平均肺動脈圧39mmHg，肺動脈造影では両肺動脈中枢側から分枝まで多発性に狭窄を認めるも末梢の血流は保たれていた。本症例は病歴から先天性の肺動脈分枝狭窄症と考えられ，稀な症例を経験したので文献的考察を加え報告する。

### 13. 血栓溶解療法後に腹腔内への大量出血を来たした急性肺動脈血栓塞栓症の1例

寒竹政司，篠原昌夫，須田　明
篠崎俊秀　　（君津中央）

61歳女性。数日前からの労作時呼吸困難を主訴に平成15年8月20日当科初診。諸検査で急性肺動脈血栓塞栓症が疑われ緊急入院となる。入院時血圧140/10mmHg。同日よりウロキナーゼ（24万単位・3日間，12万単位・3日間）とヘパリンナトリウムによる治療を開始して諸所見および臨床症状の改善が得られ，8月28日よりヘパリンナトリウムの減量とワルファリンカリウムの投与を開始した。8月29日夕方より下腹部痛が出現。8月31日に腹腔内大量出血によるショック状態に陥った。緊急動脈造影検査を行うが出血源は同定出来なかった。総計2800mlのMAPと20単位の新鮮凍結血漿の輸血を行って，腹腔内出血は保存的治療で改善した。

### 14. 流入異常動脈への塞栓術により喀血が消失したScimitar syndromeの1例

堀江美正，溝尾　朗（東京厚生年金）

症例は32歳男性。1993年頃から年に数回程度の血痰があり精査されたが異常は指摘されなかった。2003年より月に2，3回血痰が出るようになり，同年4月より喀血をきたすようになったため精査目的に5月2日当院入院となった。胸部レントゲンにて心陰影の右方への偏位と右下肺野に三日月刀様の異常陰影を認め，肺動脈造影にて部分肺静脈還流異常を確認しScimitar syndromeと診断した。また大動脈造影にて腹腔動脈及び下横隔膜動脈より右肺底区へ流入する異常血管を認めたため，同血管に対してスポンゼルによる塞栓術を施行した。以後経過良好で血痰も完全に消失した。症状を有する同疾患の治療は手術が一般的とされているが，塞栓術も選択肢の一つとなる可能性が示唆された。